第一席

茶道部部長を通して

群馬県立沼田女子高校二年（群馬県）
福島　奈桜

中学三年の夏、進路を決めるために、様々な学校のホームページやパンフレットを見ていた。そんな時、ふと目に入ったのが「邂逅庵」という言葉だった。県内の高校について詳しく書かれている冊子の、沼田女子高校の説明文に書かれていた。難しい漢字で何と読むのか分からなかったので、調べてみると「かいこうあん」と読むことが分かった。これは、沼田女子高校の中庭にある伝統的なお茶室の名前だった。県内でお茶室がある高校は、この沼田女子高校だけらしい。私の母は茶道を習っているので、私は多少お茶のことは知っていたが、実際にお茶を点てたり飲んだりしたことはなかったので、いつか自分もやってみたいと思っていた。そして私はこの高校の学校見学をすることを決めた。

学校見学当日、緑に囲まれた中庭を抜けると小さなお茶室が建っていた。学校の敷地内なのに、そこだけは空気が違っていて、葉が風で擦れる音や虫の鳴き声が静かな中庭に微かに聞こえてきた。茶道、それは私が思っていたものよりも美しいものなのかもしれない、そう思った。邂逅庵の中へ案内され、先輩方がお茶を点ててくださった。夏の静かな中庭で飲んだお茶は少し苦かったが、とても美味しかった。私は、茶道の魅力に圧倒された。この時、私の進路が決まった。

私は茶道部に入るため、沼田女子高校に入学した。しかし、新型コロナウイルスのまん延防止のため、五月ごろまで休校となった。そのため、私が茶道部に入部したころには三年生はすでに引退の時期だった。沼田女子高校茶道部は、その年は二年生が一人も居なかったので、三年生が引退したら私達一年生だけとなってしまう状況だった。そんな中、私に任されたのが部長という役職だった。正直私はドジだし、仕事もしっかりこなせる自信もなかったため、部長を任された時は頭がハテナでいっぱいだった。先輩のいない中で、慣れないことや分からないことだらけだったが、先生方の丁寧なご指導や仲間達との助け合いで、少しずつ、部長という役職をこなせるようになった。新型コロナウイルスの影響で、一年生の時はお茶会を開くことができなかった。二年になっても中々お茶会を行うことができず、開催できたとしても校内の教師だけの参加となってしまった。しかし、その分たくさんの時間を使って様々なお

点前を習うことができた。

私はこの部長という役職を通して様々なことを学ぶことができたと思う。今まで人見知りで職員室にすら入れなかった私が、先生方にも積極的に話せるようになり、自分の意見を簡潔に分かりやすく話すことが、少しずつできるようになった。今もまだ上手く人に伝えることは苦手だが、自分から話せるようになった。これは、部活の仲間や先生方のおかげだと思う。今年は新型コロナウイルスによってお茶会がほとんど開けず、人との出会いが少なかったが、私は、この茶道部の仲間や先生と出会えたこと、まさにこれこそが邂逅だと思う。このメンバーだからこそ、私は成長できた。私はこれからも、この仲間達と共に日々の部活動を取り組んでいきたいと思う。そして、いつかお客様にお茶を点てられる日が来たら、心を込めて、喜んでもらえるようなお点前をしたい。茶道は何らかのきっかけがないと改まって習うことがないので、今こうして日本の伝統文化に触れ合えたことに感謝し、ここで学んだことを日常生活にも役立てていきたい。